

博物館を創造に活かす試み

著者	八杉 佳穂, Yasugi Yoshiho, ヤスギ ヨシホ
ページ	6-9
発行年	2009-03-11
URL	http://hdl.handle.net/10502/4371

博物館を創造に活かす試み

八杉佳穂

やすぎよしほ

—— 特別展「千家十職×みんなく」実行委員長

「美というものは、単に対象の事物にあるのではなく、それを眺める人の心にあるのです。魂の深さが、普通の人には平凡と見えるものにも美を見出させるものです。道ばたに落ちて一片の木ぎれにも、美しさはあるはず。一つのもを美しいと感ずるか、否かは、それを見る人がどれだけ深く人生を眺め、どれだけ深く存在に触れているかにかかっています。」(澤瀉久敬『哲学と科学』一六四頁)

I

社会の情勢の変化に伴い、博物館の展示も変わってきており、最近では、フォーラムとかインタラクティブとかいって、展示するものとされるもの、さらには展示を見るものとの間に、何らかの関係やつながりを模索する傾向が強まっています。

国立民族学博物館(以下、民博)で二〇〇九年三月から六月にかけて開催の「千家十職×みんなく」茶の湯のものづくりと世界のわざ」展は、民博を外から利用したらどうなるかということを試みたものである。民博は民族学、文化人類学を研究する研究所である。さらに大学院大学をもっているため、教育の場であり、研究者を再生産する場でもある。そのうえ博物館をもっている。その博物館は、研究資料を集積する場であるばかりでなく、研究の成果を展示するためである。世界をカバーする大規模な博物館であるからには、ここに来たら、世界の民族、文化が何でもわかるという博物館でなければならないという使命を持っている。だが、研究所のもつ博物館、すなわち、研究博物館というのは、研究成果を展示して、来館者に見てもらうだけではなく、いろいろ変わった実験のできるころという意味もある。

民博は三十年あまりの間に、民族資料として二十六万点ほど収集してきた。世界の民族が作り出したモノを、その民族を理解する手助けとして収集したものである。しかし、モノそのものを研究の対象として収集したものは少ないし、モノそのものを研究の対象としている人も少ない。モノよりも、モノを作り出した人々、文化を研究の対象としているのである。

収集されたモノたちは、生活に必需なものから、神や霊など目に見えないものを表現したものまで、さまざまである。それらは作り出した民族、文化を理解するために必要なものである。だが、収集されたモノたちがそれだけで満足しているのだろうか。もつとモノたちを活かす方法があり得るのではないか。

巨大な構造物や大量生産されたものであふれている現代社会では、手仕事はあまり重要視されなくなった。しかし人間のサイズにあった手仕事は、人間のサイズを超えた現代でも大切なものであり、人間性の回復のためにか、ことあるごとに見直

されてきた。民博の資料はほとんどが手仕事によるものである。人間が、長い歴史の中で手を使って生み出し、使いやすいうに洗練させてきたものである。それらをこれまでとは違った視点で見えてみようというのである。

芸術家や工芸家に民博の収蔵品を見てもらうて何かを生み出すことができたなら、民博は研究所であるばかりでなく、美の源泉、発想の源泉ともなり得るのではないか。美は西洋の絵画や彫刻にばかりあるのではない。長く使われてきた道具や工芸品の中にも美がある。用いられて、研ぎ澄まされて生まれた美、すなわち用の美といつてよい。だが、収蔵品の中には、用の美ではとらえきれない、根源美ともいっていい、魂の奥底から生まれ出たような美もある。人間が生活のために作ってきたそういうモノたちが、創造の刺激剤になり得るのではないか。

II

民博を見て何かを選び何かを作れないか、と私たちが提案したのは、千家十職の方々である。千家十職というのは、千家家元と密接な関係を保ちながら、長い間茶道具を制作してきた十家であり、代々、中川淨益(金物師)、奥村吉兵衛(表具師)、黒田正玄(竹細工・柄杓師)、土田友湖(袋師)、永樂善五郎(土風炉・焼物師)、樂吉左衛門(茶碗師)、大西清右衛門(釜師)、飛來一閑(一閑張細工師)、中村宗哲(塗師)、駒澤利斎(指物師)の名を受け継いでいる(ただし歴代では違う名前を襲名したこともある。巻末資料参照)。当代で、十一代から十七代を数える。千家十職という言葉で十家がまとめられたのは、大正四年(一九一五)に大阪三越で開かれた十職展がはじめてのことであるが、それに近い形は十八世紀前半にさかのぼれるという(第二章熊倉解説文参照)。

茶の湯の道具はもろろん千利休以前からある(第二章筒井解説文参照)。しかし現在茶道具の基本となっているのは千利休の好みによる形や色であり、それを十職のそれぞれが三百年から四百年以上の長い間守ってきた。同時に道具の利便性などを考え創意工夫して、たえず新しい形を創造してきた。だが残念なことに、天明の大火(一七八八)で京都では多くが失われたばかりか、十職の作品の多くも失われた。そのため、今回の展覧会で、全代の作品がそろっているのは三家だけである。

十職は茶道具を作る集団である。表舞台である茶室において使われる道具はもろろんのこと、露地から茶室までに必要な帚とか円座など茶事を支える裏方ともいえる道具類も作ってきた(一〇八頁―一一三頁参照)。

長い伝統の中で培われてきた技術と美を追求してきた目を、世界の民族資料に対峙させると、どのようなことになるのか。茶道具の制作が専門の十職がそのような斬新な試みに参加したのである。思えば、千利休の時代から、時代の革新を試みてきた人たちである。だから利休の発見した世界が再び、と私たちは思うのであるが、彼らにとってはなんら新しい試みとはいえないものであったのかもしれない。

まず十職の皆さんに展示場を見て、次に収蔵庫に入って、気に入ったものを選んでいただくことから始まった。選んだ資料を起爆剤にして作品を作ってもらうのであるが、作品を作るといふ目的のために収蔵品を見ると、それに縛られて、自由にもに対峙できない。そこで、作品を作るといふことをひとまず考えないで、十職の方々に自由にものを見ていただくようにした。すると、七つある収蔵庫を、一日に一つずつじっくり観察される方や、一日に二つ三つの収蔵庫を見てまわる方もいたが、

いずれものづくりを専門としている人たちである。世界の民族が作り出した二十六万点ほどの資料を納得いくまで観察された。そうしてじっくり見て選ばれた資料は、多岐にわたった。世界をすべて覆うくらいいろいろな国のものが選ばれた。選ばれたものは、仮面や土器など非常に目につくものから、魚籠や屋根飾りなども含まれ、バラエティに富んでいた。それぞれの人がわかれるほど、選択されたものは、個性あふれるものとなった。

民博の収蔵品は収蔵された順に棚に並んでいる。それがコンピュータで管理されている。そのため、収蔵棚には、アフリカの仮面の横にインドネシアの屋根板があるといった具合である。見る人にとって、それは渾沌の世界である。その渾沌の中から、それぞれの人の好みに従って選ばれたものは、たとえ厳選して展示しても、それは、ある民族なり文化なりを、ものを通して理解してもらうために、学問的に体系立てて行なってきた従来の展示とは異なる。しかし、人間が生み出したものには、文化や民族を超えた何か通ずるものがある。同時に同じ民族、同じ人でも、多くの異なる、通じないものを抱えている。そうした民族を超えて共通するものや異なるものを、千家十職という伝統に培われた人の目を通して表現しようとした。そして彼らが民博の収蔵品を見て、自らの手を使い表現したものを並べてみた。

我々の美の基準は、学校教育のせいか、西洋の美の基準が唯一の基準のように思いこまされている。しかし民博の収蔵庫の品々はそういう基準をいとも簡単に吹き飛ばす。そのため、十職が選んだもののなかには、西洋の美の基準に慣らされた目からはとても美しいとは思えないものも含まれている。たしかに選ばれたものは、一見すると美しいと感じないかもしれないが、それらをよく見ると、何かしら感じるものがある。魂に語りかけるものがあるからこそ、今日の茶の湯の美の代表格である十職に選ばれたのである。

十職は茶道具を作る集団である。だが、新しく作るものは、茶道具を超えて自由に創作していただきたいと頼んだ。まったく異なるものから少しずつメタモルフォーゼ(変身)して茶道具になっていくような作品もあってもいいのではと提案した。しかし彼らは茶道具しか作らないという制限を意識的に自分たちに課している。

できた作品にはいろいろなものが含まれている。茶の道具を超えたものもある(第一章)。それは与えられた仕事をこなし、ていくという職人魂あふれた人からアーティストと呼ぶにふさわしい人まで含まれている集団であるからかもしれない。

ものを選ぶということは、人を通して行われるのであるから、少なからずその人を表わす。十職それぞれの個性を表わしている選ばれた資料と、制作された作品。それらには多様性のなかに一つの個性、統一性が感じられる。世界のものそれぞれ個性によって切り取り、表現したものであり、それは世界をそれぞれの仕方切り取る文化の原型といえるのかもしれない。

III

十職が選ぶ、作るという行為は、外から博物館を見て創造する試みである。それに対して、内から応えること。そうすることで、「千家十職×みんぱく」という図式が成り立つ。それは足し算ではなく、かけ算でなければならぬ。それに対して、私たちは、動詞で応えることにした。十職の仕事は、手仕事である。手を使つてもものを生み出す。その行為を動詞で考えてみた。

なぜ動詞か。それは広がりがあるからである。日本語の動詞は、抽象性が高く、たとえば、「はる」は、漢字で書けば、「貼る」、「張る」と異なる。つまり中国語では同じ「はる」でも動詞で区別され、その違いは漢字の違いで表わされるが、日本語では「貼る」と「張る」とを区別せず「はる」一つであり、書く場合、訓を利用して細かな違いを表現している。「くむ」ではどうだろう。「組む」のほか「汲む」や「酌む」があるが、「汲む」や「酌む」は「組む」とはアクセント（ピッチ）の位置が異なるから、異なる語彙である。このように日本語では高低のアクセントの違いで語彙を区別する。それは漢字にも反映されて「組む」とは違う字が用いられている。しかし「汲む」や「酌む」という中国語で区別される違いは、日本語では動詞一つで表わされる。つまり日本語の方が抽象性が高い。そのお蔭で、連想が広がる。それを利用して、世界の民族の生み出した用具の多様性を十職の作品と関連づけてみようというのである。

選んだ動詞は、叩く、鑄こむ、捏ねる、削る、描く、塗る、張る、組む、曲げる、切る、縫うの十一個である。それぞれ二つの動詞の間に十家の仕事を置くことで、手仕事のつながりを示そうとした。たとえば「叩く」と「鑄こむ」の中間に中川淨益、「鑄こむ」と「捏ねる」の中間に大西清右衛門の作品を置いて、少しずつ重なり合いながら十職がつながりあっていることを見せようとした（第三章小林解説文参照）。

十職の仕事の素材は、土、木、竹、金、布、紙にわけられる。そうした素材で応える方法もあつた。また、器物、塗物、縫物など、用途や仕事法で応えることもありえた。しかしそれでは同じようなものを選ぶことになり、世界の民族が生み出してきたバラエティをうまくすくい上げることができない。ところが動詞であれば、たとえば、金物を「叩く」という動詞で表わすとすると、金物から始まり、叩くものは、タパのような紙や叩き技法の土器など、材質や形、用途を超えて、人間の手による行為から生み出されたさまざまなものに広がる。それが民博のおもしろさである。

世界には王家御用達のような職人集団がいくつもある。それらの職人集団は、おおよそ限られたものしか作らない。たとえば、ミャンマーにパンセミヨと呼ばれる十の職がある。ろくろ、絵画、漆、鍛冶などの職人である。彼らは相談し合つて何かを作ることはない（第四章田村解説文参照）。しかし、千家十職の作るものの中には、何家かが共同して作るものがある。一つものを数家が相談し合つて作る場合（共作）と、たとえば茶箱のように、棗や茶碗など、それぞれの作品を、取り合わせて一つのまとまりにする場合（合作）がある。それは、この茶碗にはこの掛軸とかこの袋とか、それぞれの格にあつたものを取り合せて構成する、総合芸術といわれる茶道の一つの特徴を表わしている。

展示では、日本の伝統を背負う千家十職と、世界の民族資料を集め研究してきた民博がコラボレーションした。一見したところなんの関係も見つからない両者であるが、よく考えると、手仕事という共通するキーワードがあつた。それをもとに、ものの見方や受け取り方、人間の多様性などを考える材料が与えられ、博物館の可能性を拡げることができると、展示を我々はずがした。博物館が情報資源の場を超えて、発想の源、創造の源にもなる。博物館が学びの場から思索の場に、さらには各自が各自の思いで利用できる場になる。そんな願いを込めた。さまざまに異なる人にとって、展覧会とその成果をまとめた本書が、その人なりの利用法を考える一助となることを願っている。